

「のに」と「ために」について

「ので」と「ために」との関係をもふまえて

鄭壹芬

中国人の日本語学習者にとって、日本語の助詞の使い方は難しいようだ。難しい助詞は色々あるが、本文章では、「のに」と「ために」の異同をとりあげて論じてみたいと思う。ついでに、副主題として、「のに」と「ために」の間からむ「ので」と「ために」の関係についても考えてみようと思う。逆接の「のに」はここであつかわないことにする。

「のに」と「ために」の異同を考える前にまず次の文例を見よう。

甲、「のに」

(1) 旅行するのに、大きいバッグが便利だ。

(2) 家へ帰るのに、半日ぐらい掛らなければならない。

乙、「ために」

(1) 言葉の意味を知るために、字引を引く。

(2) 雨が降っても困らないために、傘を持っていく。

(3) 彼は、お金を借りるために、尋ねてきた。

以上、甲と乙の文中の「のに」と「ために」は、いずれも前件が後件の目的のために、使われているが、甲の文の中の「のに」

と乙の文の中の「ために」とを互に入れかえると、ちょっと不自然がある。ところで、学習者には、このような「のに」と「ために」を混同して、使っている人が多いようだ。

次は、その誤用例である。

※物と物とを交換するのに、貨幣が作られた。

※自分を満足させるのに、止むを得ない。

※親戚に会うのに、ホンコンまで行った。

※靴を買うために、どの店がいいでしょう。

※ハイキングに行くために、この靴は無理でしょう。

以上の文例は、すべて「のに」と「ために」の混用である。このような場合、「のに」と「ために」の使い分けについて、生徒にどう説明すればいいかは、日本語教師の課題ではなからうか。次に、「のに」と「ために」の使い方を分析しながら、その異同を考えてみようと思う。

まず「のに」について考えよう。

A、目的の意に用いる「のに」

(1) お弁当を食べるのに、ここは、ちょっと不適當だ。

- (2) 私が着るのに、この服は小さすぎる。
 (3) 生徒に教えるのに、この参考書がよさそうだ。

前件(A)

後件(B)

解説するうえで、便宜上、前件を(A)とし、後件(B)とする。以上の文を見て、考えられることは、

(A)の動詞は、

- (1) 常に原形である。
 (2) 否定形は、使えない。
 (3) 常に、何らかの意志を持つ動詞であり、意志に関係のない自然現象の動詞は使われない。

(B)に来る語は、

- (1) 形容詞、形容動詞が多い。
 (2) 動詞は、動作を来わすものでなく、性質や状態を来わす動詞が多い。

以上の例文は、またその時、その場合などの時間制約がある。

「のに」は、目的を表わすほか、日本語では、「ので」とともに、原因、理由を表わすこともできる。

B、原因、理由を表わす「のに」

例：

- (1) あまり高いのに、おどろいた。
 (2) うまく喋れるのに、感心した。
 (3) あまり非常識なのに、あきれた。

この場合は、原因、理由を表わすので、「ので」でおきかえる

ことができる。ただし、この場合に、後文の動詞は、常に、感性、感覚を表わす動詞が多い。

「のに」には、さらにもう一つの使い方があある。

C、

- (1) もう洗濯するのに、疲れた。
 (2) 絵をかくのに、あきた。
 (3) 彼のネクタイの色が、いつものと違うのに気がついた。
 この場合、「のに」は、「ので」でおきかえることができない。
 しかし、「のに」を「し」ことに「に入れかえてもよさそうだ。
 次に、「ために」について、考えよう。
 まず、目的の意味に用いる「ために」を使う例を挙げよう。
 D、目的の意味に用いる「ために」
 (1) 自分の力をためすために、試験を受ける。
 (2) もう少し上手になるために、努力しよう。
 (3) 太るために、もう少し食べよう。

(A)

(B)

(A)の動詞は、

- (1) 「のに」の場合と同じく原形
 (2) 動詞の種類は、「のに」の場合ほどの制約は受けない。

(B)に来る動詞

(1) 「のに」の場合と異なり、はっきりした動作、または、意志の働くものが使われる。

結局、目的を示す「ために」は、「のに」のように、その時、

その場合などの時間制約を受けず、単純に、そして、強く目的を打ち出していると考えられる。実際、「ために」と「のに」の両者は、文の中では、両方ともよい場合も多い。

これについて、二、三の例を挙げよう。

(1) パーティに行くのに、晴れ着が必要だ。

(ために)

(2) 外国語をマスターするのに、辞書が必要だ。

(ために)

E、次に、「ので」とともに、原因、理由きっかけなどを表わす場合の「ために」を見よう。

(1) 余り安いために、つい買ってしまった。

(2) 雨が降らないために、水源がかれてきた。

(3) すぐ知らせてくれたために、助かった。

(A)

(B)

(A)、(B)に用いる語の形態と性質には、ほとんど制限はない。また、「ために」を「ので」に入れかえることもできる。むしろ、「ので」の方が自然な会話体のようである。

また、(A)が原因、理由、きっかけを表わす場合でも、(B)が未来、願望、依頼、命令などを表わす時には、「ために」や「ので」は使わず、「から」を使うべきだ。例えば、

・高いので、止めよう。

・高いので、止めて下さい。

・高いので、止めなさい。

・高いので、止めてもらいたい。

上の文の中の「ので」は、むしろ「から」に入れかえた方が正しい。もちろん「ために」は使えない。

以上、論じたように、「のに」は、①目的の意を表わす。②「ので」と同様に、原因、理由を表わす。③「こと」にいう意味を表わす三つの使い分けができる。

「ために」には、①目的の意を表わす、②「ので」と同様に原因、理由を表わす、という二つの使い方がある。

次に、「のに」と「ために」は文中では、同じ目的の意を表わすことがあるが、その場合、「のに」を「ために」に入れかえられるとは限らない。例えば、

(○) a、新聞を読むのに、眼鏡がいる。

(△) b、私が着るのに、派手すぎる。

(△) c、子供に見せるのに、この本はよさそうだ。

(○) d、子供を育てるのに、苦労した。

この場合、aとdは、「ために」に入れかえてもいいが、bとcは、「ために」に入れかえると、不自然さを感じる。これは、目的を示す時、前件の動作の行なわれるその時、その場合の意が単なる目的の意と同時に、強く働いている場合に、「のに」を使わなければならないことになっているからだ。この点については、前にも述べた。

また、「ために」を使う文でも、目的の意を表わす時、「ために」は「のに」に入れかえられるとは限らない。

(△) e、自分の力を試すために、試験を受ける。

(△) f、もう少し上手になるために、努力しよう。

(△) g、太るために、もう食べよう。

(○) h、本を買うために、お金がいる。

以上 e、h の文の中で、h の文だけに限って、「ために」を「のに」に入れかえることができる。が、e、g は入れかえることができない。これは、D で述べたように、e、g の文の後件の動詞に、意志の働くものが使われているためである。というわけで、文の中で、同じ目的の意を表わすのに、「ために」を使うか、「のに」を使うかは、前件と後件をよく見て、それぞれの制約を考えながら、決めて行かなければならない。

ところで、「のに」と「ために」は、「ので」と同様に、原因、理由を表わすことができることは、もうすでに論じた。

次に、この原因、理由を表わす「のに」と「ために」は、互いにおきかえられるかどうかについて考えてみよう。

もう一度 E、の例を見よう。

(1) 余り安いために、つい買ってしまった。

(のに) …………… (X)

(2) 雨が降らないために、水源が干涸びてきた、

(のに) …………… (X)

(3) すぐ知らせてくれたために、助かった。

(のに) …………… (X)

この場合、「ために」を「のに」に入れかえると、例のように、意味が変わってしまったり、通じなかったりすることがある。また、「のに」を「ために」に入れかえるとどうであろうか。

(1) 余り高いのに、おどろいた。

(ために) …………… (△)

(2) うまく喋れるのに、感心した。

(ために) …………… (△)

(3) 日本語がちっともできないのに、困っている。

(ために) …………… (○)

この場合、「のに」を「ために」に入れかえると、(1)と(2)の例は、ちよつと不自然ではないかと思われる。

上記の文例を見たように、「ために」を「のに」に入れかえると、意味の違う文がまったく意味の分らない文になってしまう。

これは、これは、原因、理由を表わす「のに」を使う文の後件の動詞は、常に、感性、感覚を表わす動詞でなければならぬからだ。上例のように、普通の動詞を使うと、まったくわけの分らない文になることは無理もない。

では、最後に、「のに」のもう一つの独特の用法、つまり「ことに」の意を表わす用法について考えてみよう。

(1) もう洗濯するのに、疲れた。

(cp、もう洗濯するために、疲れた。) …………… (X)

(2) もうここにいるのに、あきた。

(cp、もうここにいるために、あきた。) …………… (X)

(3) 彼のネクタイ色がいつもと違うのに、気がついた。

(cp、彼のネクタイの色がいつもと違うために、気がついた。)

この場合の「のに」は、「ことに」に入れかえると、意味が

はっきりして来る。ところで、「のに」を「ために」に入れかえると、意味がおかしくなってしまう。この場合、「のに」に、「ために」を入れかえることができないことが分った。結局、「のに」のこういう使い方は、「ために」にはないので、おきかえられない。

以上、「のに」と「ために」のおきかえについて、論じてきたが、「のに」と「ために」は、場合によって、同じものとして考えられるが、場合によって、ぜんぜんおきかえられない場合もあることが分った。

「のに」と「ために」の混同について、学習者に教える時、これは不適當だという指摘だけでは、学習者は、理解できない。きちんと、その違いとその使い方について、詳しく説明できないと「のに」と「ために」及び、これにかかわる「ので」と「ために」の間におきる混同の問題は、いつまでも解決されずに残るのではないだろうか。

本文章では、「のに」と「ために」及び「ので」と「ために」について、少しまとめてみたが、完全な結論が出たとは言えない。不十分なところ及び不明確な点について、読者皆様のご教示を賜りたく思います。

参考文献：口語文法講座 3

ゆれている文法 明治書院